

文法と治療的哲学

林 晃紀 (Akinori Hayashi)

慶応義塾大学国際センター

『哲学的探究』を中心とする後期ヴィトゲンシュタイン哲学は、しばしば治療的目的を持っていると特徴づけられる。ヴィトゲンシュタインの意図は、哲学的問題に対して、体系的理論を構築することで解決を目指すのではなく、その問題が、実際には問題とする必要がない疑似問題であると示すことによって、問題の解消や消滅をねらっているのだとする。ヴィトゲンシュタインの哲学は、いわば、われわれが罹患している哲学という病を治療しようとしていると解釈される。治療的哲学という考えは、「理論を提示しない哲学」という哲学観を含意している。なぜなら、もし治療的哲学が、何らかの理論的見解を提示しようとしているのなら、それはもはや治療的哲学ではなく、通常の学術的哲学と何ら実質が異なるない形式の哲学になるからである。現在、多くの研究者が、後期ヴィトゲンシュタインの哲学が治療的であるということに同意している（現在私が知る限り、後期ヴィトゲンシュタインの哲学を治療的に解釈するのは誤っていると積極的に主張している研究者はいない）。

一方、「文法」という考えは、後期ヴィトゲンシュタインの中心的な考えの一つである。ヴィトゲンシュタインは、様々な哲学的問題を文法という視点から多岐にわたって考察しようとして試みている。文法的観点から哲学的問題を考察しようとするのは、後期ヴィトゲンシュタインの独創的方法論である。しかしながら、文法という考え方は、これまでしばしば、あたかも何らかの哲学的理論であるかのように解釈されることが多かった。ヴィトゲンシュタインは、文法という理論を構築したのだと積極的に主張しないとしても、文法が理論であることを含意してしまうような解釈が多かった。

本稿の目的は、「文法」という考えを治療的哲学の枠組みの中で理解しようとするものである。つまり、理論を提示しない治療を目的とする哲学という枠組みで、文法という考えを整合的に理解しようとする試みである。まず問題の所在を明確にするため、ハッカーの文法に関する見解を取り上げる。ハッカーの文法に関する見解は、おそらく今現在でも最も影響力のあるものの一つである。ハッカーの見解を検討することで、文法という考えを治療的哲学の枠組みでとらえようとするに関して、どのような困難を克服しなければならないかを示すつもりである。

次に、ハッカーの見解の問題点を踏まえ、どのように理解すれば文法という考えが、治療的哲学の枠組みにおいて、整合的に理解可能になるのかを示すつもりである。そして、そういった文法に関する理解が、ヴィトゲンシュタイン哲学全体の理解に、新しい洞察をもたらしてくれることを示すつもりである。